

美山著『萬見聞記』（矢澤家文書・高田図書館 所蔵）

1.. 同(天保)十亥年、頃は夏初の月夜の

五つ時の頃、西の方より其大さ月の

丸位の火の玉の光もの飛来り、中空に

とまり散乱して、形ち龍の如くなり。

人家の軒端を輝し、北斗七星の間に

半時斗有て次第く消去ぬ。

見る人の目をおどろかし候。

実に不思議の事共也。

【龍形の光物の図】

如此もの也

2.. 嘉永三戌正月末廿四日夜、妙高山の

当りより出しよふにて、山の腰を二三度

廻り、其大さ成事すけ笠の丸さ程にて、

凡日中の如く也。

北海の中に下入用にて、其後、此の方

鳴ひき、雷地震の如、諸人目を

おどろかさぬはなし。跡にて聞へ有之。

四五拾里程は同じ事也。

実にふしぎ成事共なり。

【丸い光物の図】

如此もの也

一八三九年、初夏の午後8時ころ、西から満月くらいの大さの火の玉のような光ったものが飛んで来た。中空にとどまった後に散乱し、形は龍のようになった。人家の軒端を照らし、北斗七星の辺りに1時間くらいあったが、次第に消えていった。見た人は、驚いていた。実に不思議な出来事だった。上の図のようだった。

一八五〇年1月24日の夜、妙高山の辺りから出現したようだが、山の腰を二三度回っていた。大きさは菅笠くらいの丸さで、まるで昼間のようだった。北の海に沈むようにも見えたが、その後、北の方で鳴り響き、雷地震のようだった。人々は皆、おどろいた。後で聞いたうわさでは、広範囲で同じような現象が見られたようだ。実に不思議な出来事だった。上の図のようだった。